

19 章

【新改訳改訂第3版】黙示録 19 章 1～2 節

- 1 この後、私は、天に大群衆の大きい声のようなものが、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。
- 2 **神のさばき**は真実で、正しいからである。神は不品行によって地を汚した**大淫婦**をさばき、ご自分のしもべたちの血の報復を彼女にされたからである。」

(1) 黙示録にある四つの「ハレルヤ」

- 新約聖書で初めて「ハレルヤ」ということばが登場します。新約では 4 回。しかもこの 19 章に集中しています。「ハレルヤ」とは「主を賛美せよ」という意味ですが、地上に神の最終的な審判が下される場面で用いられています。
- 神の審判(さばき)の対象は、「不品行によって地を汚した大淫婦」に向けられています。なぜなら、いつの時代でも神を信じる者たちはこの「大淫婦」によって迫害されて来たからです。「大淫婦」とは、本レジュメ 88 頁にも記したように、「女」「母」「大バビロン」と同様に、神に敵対する一つの世界的な組織を表わしています。「大バビロン」のことを 17 章 18 節では「地上の王たちを支配する大きな都」と表現されていました。それは神の民を抑圧する偽りの組織の根源と言えます。
- 「バビロン」という名前の起源はヘブル語の「バベル」(「バーヴェル」בָּבֶל)で、「混乱」を意味します。ノアの大洪水後、人類は再び増え広がって行きましたが、特にノアの三人の息子たちの中のハムの子孫の中からニムロデという地上で最初の権力者が登場します(創世記 10:8)。彼はバベルを中心地にして神に反逆する世界を打ち立てようとしたのです。彼は周辺の多くの国を支配するようになり、「大きな町」を建てたのです。つまり、真の神を認め、神に拠り頼むことのない都の基礎を築こうとしたのです。神に反逆するニムロデの系譜は古代から今日に至るまで、途切れることなく続いているのです。特に、反キリストが支配する患難時代においては「聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔って」いるのです(黙示録 17:6)。
- 黙示録 18 章ではこの「大バビロン」に対する神のさばきが一瞬に来て荒れすたれることが記されています。それゆえ、18 章 20 節には「おお、天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都のことで喜びなさい。神は、あなたがたのために、この都にさばきを宣告されたからです。」と記されています。この声に応答しているのが、19 章 1～6 節にある天上の聖徒たちの賛美なのです。3～6 節は以下の通りです。

【新改訳改訂第3版】黙示録 19 章 3～6 節

- 3 **彼ら**(1 節にある天の大群衆の大きな声)は再び言った。「ハレルヤ。彼女の煙は永遠に立ち上る。」
- 4 すると、**二十四人の長老と四つの生き物**はひれ伏し、御座についておられる神を拝んで、「アーメン。ハレルヤ」と言った。
- 5 また、御座から声が出て言った。「すべての、神のしもべたち。小さい者も大きい者も、神を恐れかしこむ者たちよ。われらの神を賛美せよ。」
- 6 また、私は**大群衆の声、大水の音、激しい雷鳴のようなもの**が、こう言うのを聞いた。「ハレルヤ。万物の支配者である、われらの神である主は王となられた。」

(2) 小羊の婚宴

- 賛美の中の一部ですが、小羊の婚姻と婚宴のことが語られています。

19:7 私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。

19:8 花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。

- 7節には「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時に来て、花嫁はその用意ができたのだから。」とあります。「小羊の婚姻の時に来て」の「来て」はアオリスト時制で、すでに「来た」という意味です。「用意ができた」とあるのもアオリスト時制で、過去のある時点ですすでに用意ができたという意味です。8節のキリストの花嫁が「光輝く、きよい麻布を着ることを許された」もアオリスト時制です。しかし、9節にある「小羊の婚宴(婚礼の祝宴)」はこれからのことです。つまりキリストが地上に再臨した後のことです。とはいえ、この婚宴に招かれる幸いな者たちはすでに決まっているのです。

- 婚姻と婚宴は別の事柄として理解しなければなりません。キリストの花嫁はすでに空中携挙によって天において結婚式を挙げているのです。しかし、キリストが地上再臨して大バビロンが一瞬にして滅び去った後でないと、この地上で婚宴は開かれないということです。「これは神の真実のことばです」と御使いはヨハネに語っています(9節)。

(3) キリストの地上再臨

【新改訳改訂第3版】黙示録 19章 11～16節

- 11 また、**私は開かれた天を見た**。見よ。白い馬がいる。それに乗った方は、「忠実また真実」と呼ばれる方であり、**義をもってさばきをし、戦いをされる**。

- 12 その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があつて、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。

- 13 その方は**血に染まった衣**を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。

- 14 天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。

- 15 この方の口からは諸国の民を打つために、鋭い剣が出ていた。**この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される**。この方はまた、万物の支配者である神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる。

- 16 その着物にも、ももにも、「王の王、主の主」という名が書かれていた。



- 天が開かれて、イエシュアが白い馬にのって現われます。11節以降に記されているのは、栄光の王であられるキリストです。その方は「忠実また真実」な方です(黙示 1:5/3:7, 14)。しかも「義をもってさばきをし」とは、地上にいる者たちの受けるべきさばきです。「その目は燃える炎」という表現もすでにありました(同、1:14/2:18)。

「その頭には多くの冠があつた」とありますが、反キリストも、キリストの真似をして白い馬に乗って現われました(6:2)。彼は十か国連合の独裁者となりますが、彼の冠は征服することによって得た冠です。しかし、キリストの「多くの冠」は絶対的権威者としての冠なのです。

- 13節の「その方は**血に染まった衣**を着て」いますが、「天にある軍勢はまっ白な、きよい麻布を着て、白い馬に乗って彼につき従った。」とあります(14節)。⇒上記のイラスト参照。

- 「この方は、鉄の杖をもって彼らを牧される」とは、詩篇 2 篇に預言されていることの成就です。しかも「**神の激しい怒りの酒ぶねを踏まれる**」とあります。これもイザヤ書 63 章 1～3 節の預言の成就です。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 63 章 1～3 節

63:1 「エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。」「正義を語り、救うに力強い者、それがわたしだ。」

63:2 「なぜ、あなたの着物は赤く、あなたの衣は酒ぶねを踏む者のようなのか。」

63:3 「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ。国々の民のうちに、わたしと事を共にする者はいなかった。わたしは怒って彼らを踏み、憤って彼らを踏みにじった。それで、彼らの血のしたたりが、わたしの衣にふりかかり、わたしの着物を、すっかり汚してしまった。」

- この箇所では「わたしはひとりで酒ぶねを踏んだ」とあります。つまり、他の者にはその資格がないということですから。キリストだけが**大勢の人々**をさばかれるのです。これが最終戦争と呼ばれる「ハルマゲドン」の戦いです。

(4) 神の大宴会、そして、獣、および偽預言者の滅び

【新改訳改訂第 3 版】黙示録 19 章 17～21 節

17 また私は、太陽の中にひとりの御使いが立っているのを見た。彼は大声で叫び、中天を飛ぶすべての鳥に言った。

「さあ、神の大宴会に集まり、

18 王の肉、千人隊長の肉、勇者の肉、馬とそれに乗る者の肉、すべての自由人と奴隷、小さい者と大きい者の肉を食べよ。」

19 また私は、獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢と戦いを交えるのを見た。

20 すると、獣は捕らえられた。また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを惑わしたあのにせ預言者も、彼といっしょに捕らえられた。そして、このふたりは、硫黄の燃えている火の池に、生きたまま投げ込まれた。

21 残りの者たちも、馬に乗った方の口から出る剣によって殺され、すべての鳥が、彼らの肉を飽きるほどに食べた。

- ここでの大宴会は、聖徒たちによる宴会ではありません。イエシュアがマタイの福音書 24 章 28 節で、「死体のあ
る所には、はげたかが集まります」と言われました。それはハルマゲドンの戦いによって多くの者たちがさばかれ、死ぬからです。その死体が膨大な数に上るため、葬ることができず、はげたかなどがその肉を食べるといふ惨状となるのです。

- 反キリストとにせ預言者は、メシア王国(千年王国)が始まる前に「硫黄の燃えている火の池」に、生きたまま投げ込まれます。この「火の池」は、永遠のゲヘナとも呼ばれ、実際のからだをもって投げ込まれる場所です。そのさばきがどれほど恐ろしいものかは、私たちには想像することができません。

20 章

●20 章には、「私は・・・見た。」という構文が以下のように数多くあります。また、「千年」という用語も 6 回登場しますが、黙示録 20 章にのみある言葉です。

【新改訳改訂第 3 版】ヨハネの黙示録 20 章 1～3 節

20:1 また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から下って来るのを見た。

20:2 彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕らえ、これを千年の間縛って、

20:3 底知れぬ所に投げ込んで、そこを閉じ、その上に封印して、千年の終わるまでは、それが諸国の民を惑わすことのないようにした。サタンは、そのあとでしばらくの間、解放されなければならない。

20:4 また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。

また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人々を見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。

20:5 そのほかの死者は、千年の終わるまでは、生き返らなかった。これが第一の復活である。

20:6 この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。

●今回は、大患難の終わりにキリストが地上再臨された後に、この地上に実現する「千年王国」を取り上げます。「千年」という限定された期間を、象徴的な意味でなく、字義通りに受け止め、神の歴史のマスタープランにおいて、この「千年王国」がなぜ必要なのか、その千年王国はどのような時代なのか、どのような祝福があるのかを正しく理解する必要があります。なぜなら、クリスチャンは七年間の患難時代に入る前にキリストの空中再臨によって携挙されていますが、患難時代の最後に、反キリストの軍勢を滅ぼしてイスラエルを救うためにキリストが地上再臨するときには、花嫁である教会もキリストの花嫁として共にこの地上に来て、千年の間、王である祭司としての働きをするように定められているからです。ですから、この「千年王国」について知っておかなければならないのです。

●「千年王国」についての学びをすることで、聖書が教えている数多くのピースがうまくつながり、パズルとしての全体像がはっきりと見えてくるのです。旧約の歴史や預言者が語っていたことや、主イエス・キリストがこの世に連れて語られた「御国の福音」の意味がより明確にされるはずで。

●神の歴史におけるマスタープランを正しく理解することは重要です。たとえば、詩篇の瞑想をするとき、最初の第 1 篇はそれほど難しくなくても、次の第 2 篇を読んでもつまづく人は多いはずで。なぜなら、どのように理解してよいか分からないからです。実は、詩篇 2 篇は、キリストの誕生と再臨、そしてその後に来る「千年王国」におけるキリストの支配(メシア的王国)のことが、一つのピクチャーを見るように語られているからです。

●私たちが星座を観る時、そこには無数の星が見えます。しかし、その一つひとつの星はそれぞれ遠く離れており、星の誕生した時も異なれば、すでに消滅してしまった星も見ているかもしれません。遠く離れて観ているために、空

間軸も時間軸もない同一平面上にある一つのピクチャーとして見ています。聖書も同様で、やがて起こることの時間軸を無視して一枚の絵を見るように記されています。しかし将来に起こる出来事は必ず時間軸の中で起こってくるため、すで実現したこと、まだ実現していないこと、将来のどのあたりで実現するのかといった神のご計画全体の大枠を整理して知っておく必要があるのです。そうでなければ、私たちは、パウロの言うように、「空を打つような拳闘」をしたり、「決勝点がどこかわからないような走り方」をしたりすることになってしまいます。そうしたことを避けるためにも、これから起こる事を正しく理解する必要があります。

●「千年王国」についての学びをすることによって、聖書全体に記されている多くの事柄がバラバラではなく、すべてが繋がってくることを発見できるようになります。それだけでなく、確かな希望から来るぶれることのない、かつ、自信をもった生き方ができるようになると信じます。千年王国は神の歴史におけるマスタープランの要石なのです。

(1) ヨハネの黙示録の 20 章の重要性

●まず、ヨハネの黙示録 20 章 1～6 節までを読んでみましょう。そこには「千年王国」の始まりについて記されています。ちなみに、7～15 節は「千年王国」の終わりについて記されています。「千年」ということばが聖書の中で出て来るのは、ここ黙示録の 20 章だけです。「千年」ということばが 7 回も繰り返されて使われています。重要な事柄にもかかわらず、全聖書の中でこの章にしか出てこないのです。「千年」という期間にもかかわらず、こんなわずかなスペースでしか語られていないことに、ある人々はその出来事の信じよう性を疑います。しかし、この黙示録 20 章の偉大な貢献は、旧約時代、新約時代で語られてきた神の約束(特に、イスラエルの民に対して語られた多くの約束)の成就とその期間、完成された御国の期間が、「千年」という限定された期間であることが啓示されている点です。他の箇所では決して言われていないこの事実を、黙示録 20 章が記しているということです。神が約束された「メシア的王国」のことが多く語られていたとしても、その期間が「千年」であることを啓示しているのは、ヨハネの黙示録 20 章だけなのです。それだけでも、この箇所は神のマスタープランを知る上で価値のある重要な箇所と言えます。また別の言い方をすれば、この章の理解が、聖書の理解、神の歴史のマスタープランの理解を決定づけるとも言えるのです。



●このことへの理解がないばかりに、私たちは死んだ後のことがよく分からないということになります。「死んだら、天国に行く」という考えは、今日、マスコミを通して、この世の考え方になって来ています。しかしその天国がどういふ所なのか、多くの人々が確信をもって語る事ができないのが現状です。実は、クリスチャンたちも同じレベルです。「死んだら、天国へ行く」ということだけですべてを済ませてしまっているとすれば、神の備えられたすばらしい福音を語り伝える事はできません。いわば煙に巻かれている状態なのです。

(2) サタンの幽閉

●「千年王国」はサタンの幽閉から始まります。1 節には、「御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手を持って、

天から下って来るのを見た」とあります。「見た」のは使徒ヨハネ自身ですが、「御使い」の名前は記されていません。この「御使い」とは、主イエスのことだという見方がありますが、いずれにせよ、王であるキリストから来ていることには間違いありません。

●なぜ、その御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖をもって天から下って来たかといえば、それは2節にあるように、「悪魔でありサタンである竜」「あの古い蛇」を捕えて、千年の間縛り、底知れぬ所に投げ込み、そこを閉じ、そこを封印するためでした。「古い蛇」とは、創世記3章に出て来る「獣の中で最も賢い存在」であった蛇、サタンが蛇に変身してエバに近づいて騙した、あの蛇のことです。黙示録19章19節以降を読むと分かるように、ヨハネはすでにハルマゲドンと呼ばれる最後の戦い―「獣と地上の王たちとその軍勢が集まり、馬に乗った方とその軍勢が戦いを交えるのを見た」―その後で、獣は捕えられ、また、獣の前でしるしを行い、それによって獣の刻印を受けた人々と獣の像を拝む人々とを感わしたあの偽預言者も、彼といっしょに捕えられています。このふたりは、硫黄の燃える火の池に、生きてままで投げ込まれたとあります。つまり、「獣」と呼ばれる反キリストと、「獣」を支える「偽預言者」はやがて千年の後にサタンも投げ込まれる「火の池」にすでに先に投げ込まれてしまっています。その大御所であるサタン(悪魔)は、千年間、「底知れぬ穴」に幽閉され、その後、そこから一時解放された後に、「獣」と「偽預言者」のいる「火と硫黄との池」(地獄)に投げ込まれます(20:10)。千年王国の最後の審判において、すべての者が死からよみがえりますが、「いのちの書に名の記されていない者はみな、この火の池に投げ込まれます(20:15)。そこは「永遠に昼も夜も苦しみを受ける所」です(20:10)。

(3) サタンの幽閉の目的

●サタン(悪魔)を幽閉した目的は、3節にあるように、「千年の終わるまでは、諸国の民を感わすことのないように」するためでした。しかし、それは消極的な面です。積極的な面は、神が約束された御国をこの地上で実現させるためです。神の民イスラエルに対してなされてきた約束が完全に成就するためです。また、神を信頼して信仰を貫き通した者たちに、地上においてさばきを行う権威を与えるためです。さらには、かつて地上にあったエデンの園が回復されたその祝福を味わわせるためなのです。このことについては、また別の時に扱いたいと思います。

「千年王国の祝福」については、黙示録20章では扱われていません。それはむしろ旧約聖書の中にそのことが多く啓示されているからです。それらを一つひとつ丁寧に学ぶことにより、一層、この千年王国のすばらしさを知ることができます。しかしながら、そのすばらしい千年間に及ぶ祝福も、その後を訪れる「新しい天と新しい地」という永遠の御国の前座的期間でしかないということです。

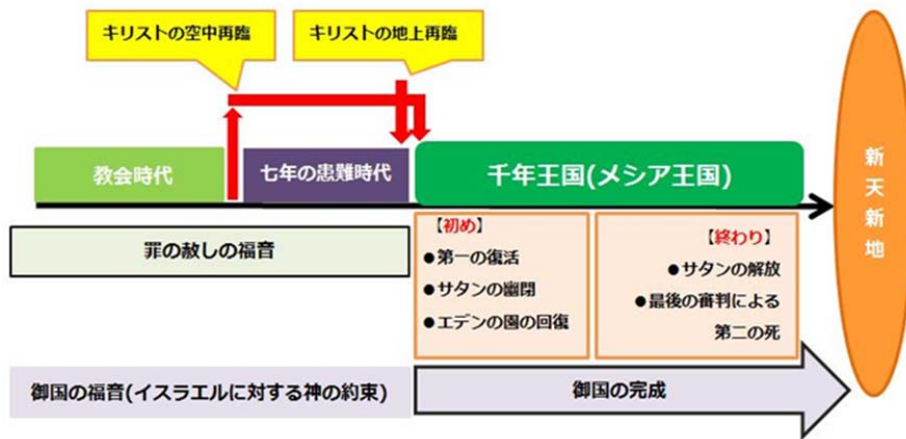
●限定された「千年王国」の目的は、神が、神の民イスラエルに対して約束されたことについてどこまでも真実な方であるということをおかす期間なのです。それは神にとっても、神の民にとっても至福の喜びです。また教会もその喜びを分かち合うため招かれているのです。

(4) 「第一の復活」と「第二の死」が意味すること

●黙示録20章6節に、「第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。」とあります。「第一の復活」ということば、さらには「第二の死」ということばが出てきます。「第一の復活」とは、千年王国で生きるために、新しい朽ちることのないからだを与えられることを言います。携挙された教会はすでに朽ちることのないからだに変えられていますから、文句なしに、この「第一の復活」に与っています。黙示録20章でいう「第一の復活」に与った人

とは、患難時代、大患難時代を括り抜けて信仰を貫き、殉教した人々(異邦人、およびイスラエルの民)のことで、キリストの再臨の時に、この「第一の復活」に与ることができます。イエスはこの「第一の復活」の初穂となられたのです(Ⅰコリント 15:23)。初穂とは、次に続く収穫があることを意味しています。

●「第二の死」ということばが出てきます。「第一の復活」に与った者には、それは「何の力もない」とあります。第一の死に対しては、よみがえりのいのちによって復活し、朽ちない新しいからだを与えられています。しかしそうでない者は、千年王国の終わりの大審判が行われるときに死からよみがえります。しかし、それは「第二の死」に定められるためです。つまり、いのちの書に記されていない者たちは、獣と偽預言者、そしてサタンがいる同じ火の池に投げ込まれるのです。これが「第二の死」と言われるもので、永遠に苦しみ続けるところに置かれるということなのです。これほど恐ろしいことはありません。決して、無(Nothing)の世界ではありません。これまでのことをまとめると、以下の図のようになります。



(5) 「千年王国」は「神の国、天の御国」とイコール

①千年王国は、旧約で預言されていたメシア的王国のこと

●バプテスマのヨハネも、そして御子イエスも「悔い改めよ。天の御国は近づいた」と言って、「御国の福音」を宣べ伝えられました。ヨハネもイエスもいわば、旧約で約束された神の約束がこの地上で実現(完成)されるために、この世に遣わされた存在です。彼らが語り、またイエスの弟子たちが語った福音は、「御国の福音」でした。それは、別の言葉で言うならば、「メシア的王国の福音」です。それは、メシアが主権をもって樹立する可視的な地上における神の王国です。ところが、メシアであるイエスが当時のイスラエルの民によって拒絶されたために、その実現は延期されることになりました。その間、奥義としての「教会」が誕生して、神の救いの恵みとしての「罪の赦しの福音」が伝えられることで、異邦人もキリストの花嫁としての祝福を受けるようになります。このこともすでに神の奇いご計画の中にあっただのですが、実際は奥義として隠されていました。しかし、そのことが使徒パウロに啓示され、それが彼を通して伝えられるようになりました。しかも、異邦人に対しては、「御国の福音」というよりも、「罪の赦しの福音」、あるいは「神の恵みの福音」として伝えられていきました(使徒 20:24)。「千年王国」は神がイスラエルの民に約束された「御国の福音の成就(完成)」のあかしであり、また同時に、キリストの教会もイスラエルに接ぎ木されることで、その祝福にあずかる特権が与えられています。いわばイスラエルの民と共同の相続財産を受けているのです(エペソ 3:6)。

②千年王国の統治形態

●黙示録 20 章 4 節に「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。・・・彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。」とあります。6 節では、「彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。」と記されています。

●「彼ら」とは、イスラエルの民で、反キリストの大患難に屈せず殉教した人たちです。彼らは、王という立場で、御国においてなんらかのさばきを行う地位に着かせられます。異邦人を多く含む「教会」の立ち位置も、同じく王であり、祭司としての務めを果たしますが、イスラエルの民はエルサレムを中心とした形でその立場に着くと考えられます。「千年王国」においては、世界の中心はエルサレムになります。世界の諸国の民は王の王、主の主であられるキリストを礼拝するためにエルサレムに集まります。「王の王、主の主」を英語で表記すると KING OF KINGS AND LORD OF LORDS. ギリシア語だと Βασιλεὺς βασιλέων καὶ κύριος κυρίων.となります。

●千年王国の統治形態は、民主主義ではなく、メシアであるイエス、王の王、主の主による専制君主制による統治です。メシアの統治は全世界に及びますが、その権威の委譲は、イスラエルに対してのものと、異邦人に対してのものとの二つがあります。前者はエルサレムを中心として(この時代はエルサレムが世界の中心となります)、後者は世界の諸国においてなされます。

●千年王国において、ダビデがイスラエルの王として復活させられるならば、当然、ダビデの仮庵(幕屋)も復活します。アモスが預言したように、「**その日**、わたしはダビデの倒れている仮庵を起こし、その破れを繕い、その廃墟を復興し、昔の日のようにこれを建て直す。」(アモス書 9:11)ということばが成就します。

(6) 千年王国の終わりのサタンの解放と最後の反逆

●まずは、サタンが千年の間、閉じこめられていた「牢」から解放された後に、最後の反逆が起こり、そしてサタンの最期が記されている箇所を見ていきましょう。

20:7 しかし**千年の終わりに**、サタンはその牢から解き放され、

20:8 地の四方にある諸国の民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わすために出て行き、戦いのために彼らを召集する。

彼らの数は海への砂のようである。

20:9 彼らは、地上の広い平地に上って来て、聖徒たちの陣営と愛された都とを取り囲んだ。すると、天から火が降って来て、彼らを焼き尽くした。

20:10 そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。

●「千年の終わりに、サタンはその牢から解き放され」ます。「その牢」とは、千年の間、諸国の民をまどわすことのないようにと御使いによって捕えられ、縛られて、投げ込まれていた「底知れぬ所」のことです。サタン(悪魔)は霊的な存在であるゆえに、「底知れぬ所」も物質的な場所ではなく、神によって備えられた霊的な場所と考えられます。聖書ではそこを「地獄」とも「暗闇の穴」とも呼んでいます。

ヨハネの黙示録を味わう

●Ⅱペテロ 2章4節

神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。
(「地獄に引き渡す」は「タルタロウ」ταρταρόωでここにしか使われていない言葉です。「暗やみ」は「ゾホス」ζοφος)

●ユダ 6節

また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。

●聖書のいう「地獄」とは、サタンとその手下どもが最後のさばきの時まで閉じ込められている霊的な場所なのです。彼らの本当の最後のさばきの場所は、地獄ではなく、「火と硫黄との池」と呼ばれる永遠の苦しみの場所です。人間が死んだ後に行くところが、「パラダイス」であったり、あるいは「ゲヘナ」「ハデス」であったりしますが、特に後者の場合、その訳語は聖書の訳によって以下のようにまちまちです。

日本語訳聖書における訳し分け対照表							
ギリシャ語	聖書箇所	日本正教会訳聖書	ラゲ訳聖書	大正改訳聖書	口語訳聖書	新改訳聖書	新共同訳聖書
γέεννα	マタイ 5:22	地獄 (ルビ「ゲエンナ」)	地獄	ゲヘナ	地獄	ゲヘナ	地獄
	マタイ 18:9	地獄 (ルビ「ゲエンナ」)	地獄	ゲヘナ	地獄	ゲヘナ	地獄
	マルコ 18:9	地獄 (ルビ「ゲエンナ」)	地獄	ゲヘナ	地獄	ゲヘナ	地獄
	ルカ 12:5	地獄 (ルビ「ゲエンナ」)	地獄	ゲヘナ	地獄	ゲヘナ	地獄
Ἅδης	マタイ 11:23	地獄 (ルビ「ぢごく」)	地獄	黄泉	黄泉	ハデス	陰府
	ルカ 16:23	地獄 (ルビ「ぢごく」)	地獄	黄泉	黄泉	ハデス	陰府
	使徒行伝 2:31	地獄 (ルビ「ぢごく」)	冥府	黄泉	黄泉	ハデス	陰府
	黙示録 1:18	地獄 (ルビ「ぢごく」)	地獄	陰府	黄泉	ハデス	陰府
	黙示録 20:13	地獄 (ルビ「ぢごく」)	冥府	陰府	黄泉	ハデス	陰府

●上の表を見ると分かるように、ギリシア語の「ゲヘナ」「ハデス」は、従来、「陰府」(よみ)とか「黄泉」(よみ)と訳されていましたが、それらの訳語は他の宗教の教えを混入させて読み込まれているという懸念から、新改訳聖書の場合にはそのまま音読みでとどめています。「ハデス」とは「未信者が終末のさばきを待つ間の中間状態で置かれる場所」を指し、「ゲヘナ」とは「神の究極のさばきによって、罪人が入れられる苦しみの場所」を指しています。この「ゲヘナ」が黙示録 20章では「第二の死」に至った者が行く「火と硫黄との池」として描かれています。

① 悪魔が解き放されなければならない理由

●さて、「底知れぬ所」(地獄)に投げ込まれていた「悪魔」が、千年の終わりにしばらくの間、「解き放されなければならない。」とあります。何ゆえにサタンは解き放たれなければならないのでしょうか。そこには神の必然性を表すギリシア語の「デイ」δει(現在形)が使われています。「デイ」は論理的に必ずそうならなければならないという

動詞ですが、その理由について聖書は何も記していません。その理由として考えられるのは、以下の事です(ジョン・F・ワルブード著「イエス・キリストの黙示」、いのちのことば社、555 頁参照)。

- ① 人間はどんなに恵まれた環境の下に置かれていたとしても、自分の選択に任せるなら、罪と悪に陥ることを示すため。
- ② 人間の行為について、神が予知できることを示すため。
- ③ サタンの決して変わることはない悪性を明らかにするため。
- ④ 長期間、神の支配の下に置かれても、人(自然体の体を持った人)の邪悪な性格は変わらないことを明らかにして、永遠の刑罰を正当なものであることを人々に知らせるため。

②悪魔が召集した「ゴグとマゴグ」(20:8)

●「ゴグとマゴグ」について、黙示録 20 章ではなんの説明もなく用いられています。黙示録 20 章の「ゴグとマゴグ」は、エゼキエル書 38 章と 39 章に記されている預言の成就であるということは言えません。なぜなら、以下に見るように明らかな違いがあるからです。ここにきて、私も誤解していたことが分かりました。

- ① エゼキエル書のゴグの軍隊は同士打ちで滅びますが、黙示録のゴグの軍隊は天からの火で焼き尽くされるとあるからです。
- ② エゼキエル書ではゴグとマゴグの軍隊の兵士たちを片付けるのに七か月かかるとされていますが、黙示録 20 章ではゴグとマゴグが滅ぼされると、その直後に大きな白い御座による最後のさばきが始まるからです。
- ③ エゼキエル書ではゴグとマゴグとの侵略があった後にイスラエルの民は自分たちの罪を悔い改めると記されていますから、ゴグとマゴグの侵略は千年王国の前に行われると考えられます。
- ④ エゼキエル書の「マゴグ」は地名、「ゴグ」はその大首長名ですが、黙示録の「ゴグとマゴグ」は、神と聖徒たちを襲撃する人々を象徴しています。

—したがって、エゼキエル書と黙示録に記されているゴグとマゴグのエルサレム侵略とは異なる出来事なのです。

●では、黙示録 20 章の「ゴグとマゴグ」とは何でしょうか。それは邪悪な性格をもった支配者(ゴグ)と諸国民(マゴグ)を表わしており、解き放されたサタンの惑わしによって召集された軍隊です。しかも、彼らの数は海辺の砂のようだとあります。千年王国では百歳までに死ぬ人はのろわれた人と言われるほどに、平和が支配し、主を知る知識が世界を覆っているにもかかわらず、サタンが解放されるとたちまちサタンの呼びかけに応ずる輩がいるのです。それが、「ゴグとマゴグ」です。それにしても、人の罪がいかに深いかということをこのことから思い知らされます。朽ちないからだを与えられて千年王国に入った人々は、御使いたちと同じく、めとったり、嫁いだりすることはありません(マタイ 22:30)。また、罪を犯すこともできないのです。しかし、患難時代を生き延びて、朽ちないからだを持たずに千年王国に入った者たちは、現代の私たちと同様の肉体を持つために、結婚し、かつ子どもを産むことができます。また、千年王国においては百歳以下で死ぬ者はのろわれた罪人とされますが、それ以外の者たちは死ぬことがないため、人口の数は時間の経過とともに次第に多くなっていきます。子どもが生まれたとしても、信仰は遺伝するわけではないので、中にはイエスをメシアとして信じることを拒む者たちがいてもおかしくありません。千年王国

において生まれた人間が、たとえ神の栄光を見たとしても、即、神を信じる力が与えられるということはないのです。自分の肉に従う道を選ぶことが許されているのです。

● 牢から解放されたサタンの惑わしと欺きは、そうした諸国の者たちにもものすごい勢いで影響を及ぼします。千年王国の始まりの時点では「剣」を「鋤」に、「槍」を「鎌」に打ち直されました。しかし千年王国の終わりには、サタンが「鋤」を「剣」に、「鎌」を「槍」に打ち返して武器をつくり、神に対する大反乱を引き起こします。サタンに従った諸国の軍勢はイスラエルに侵攻し、「聖徒たちの陣営と愛された都」、すなわち、エルサレムを取り囲みます。しかしその時、天からの火によって諸国の軍勢は一瞬にして焼き尽くされるのです。原文では「火が天から降って来て、食い尽くした」となっています。皮肉なことに、エルサレムに「上って来た」敵の軍勢に対して、天からの火が「降って来て」彼らを焼き尽くすというのが神の答えでした。こうした光景は、旧約聖書のユダの王ヒゼキヤの治世の時に起こったことと似ています。エルサレムを包囲したアッシリヤの軍勢(18万5千人)を、神がひとりの御使いを遣わして、一夜にして全滅させました(Ⅱ列王記 19 章、Ⅱ歴代誌 32 章に詳しく記されています)。これは悪の勢力を、一瞬にして、十把一絡げにして滅ぼすという神の最終的勝利のひな型です。

③ 悪魔の最期

● 10 節を見てみましょう。その後、「彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。」とあります。この「火と硫黄との池」に投げ込まれたならば、そこから出る方法は全くありません。これが悪魔の最期の運命です。すでにその池には、「獣」と多くの人々を惑わした「にせ預言者」も生きてそのまま投げ込まれています(黙示録 19:20)。彼らはその池で、「永遠に昼も夜も苦しみを受ける」と記されています(黙示録 20:10)。

(7) 天と地は崩れ去り、あとかたもなくなる(20:11)

20:11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。

① 「私は・・・を見た」という定型句

● これは黙示録の独特で重要な表現です。黙示録では預言的啓示の次の段階を表わす時に使われているようです。20 章だけでも 5 回ありますので、ヨハネが何を見たのか確認しておきましょう。

- | |
|--|
| ①20:01 「また私は、御使いが底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手にとって、天から下って来るのを見た。」 |
| ②20:04 「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。」 |
| ③20:04 「また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。」 |
| ④20:11 「また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。」 |
| ⑤20:12 「また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。」 |
| ⑥21:01 「また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。」 |
| ⑦21:02 「私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、・・・神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。」 |

②天と地が崩れ去った後に、最後の審判、そして新しい天と新しい地に・・

●流れとしては、11 節の「大きな白い御座」を見ると同時に、ヨハネは「地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった」ことを見えています。ということは、「大きな白い御座」は「天」にも「地」にもないということになります。では、いったいどこにあるのでしょうか。天でもなく、地でもないところと言えば「空中」しかありません。中途半端な場所ですが、そこで最後の審判が行われるのです。あるいは、パウロが見た「第三の天」かもしれません。いずれにしても、そこで最後の審判が行われると考えられます。

(8) 大きな白い御座における最後の審判(20:12~15)

12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行いに応じてさばかれた。

13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのこの自分の行いに応じてさばかれた。

14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。

15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

①白い御座とそこに着座されている方とはだれか

●ヨハネは「大きな白い御座」とそこに着座しておられる方を見えています。なにゆえに、「白い御座」なのでしょう。黙示録 4 章には、ヨハネが天にある御座を見たことが記されています。御座にはそこについている方がいるのですが、御座の回りは碧玉、赤めのう、緑玉のように見える虹があり、それらの光が交差するところは白くなっているからです。白くなっているためにその御座にはだれが座しているのか目には見えなかったのです。

●しかし、御座に座っておられる方をヨハネは見えています。だれが座っていたのでしょうか。ちなみに、黙示録では、「御父」とか、「御子」という表現は一度もありません。御父の場合は「御座におられるお方」と表現し、御子は「小羊」が使われています(「アルニオン」は黙示録特愛用語です)。この場合の「小羊」は「勝利の小羊」です。

●黙示録 20 章において、最後の審判のために「白い御座についておられる方」とはだれのことなのでしょう。黙示録では、「御座に着いておられる方」は御父です。答えは、ヨハネの福音書 5 章 22, 27 節、10 章 30 節のみことばがヒントになります。

- ①ヨハネ 5:22 「父はさばかず、すべてのさばきを子にゆだねられました。」
- ②ヨハネ 5:27 「父はさばきを行う権を子に与えられました。」
- ③ヨハネ 10:30 「わたしと父とは一つです。」

●上記のみことばによれば、黙示録の最後の審判において、御座に着座されている方は王であるメシアであるイエシュアということになります。とはいえ、イエシュアは独断でさばくのではなく、自分をこの地に遣わされた方のみことばに従ってさばくとありますから、御子がさばくことは、御父がさばくことでもあるのです。

②最後の審判

●最後の審判を免れる者はだれひとりとしておりません。おのおのすべての人が、そのしわざに応じて、さばきを受けることが定まっているのです。ヘブル人への手紙 9 章 27 節には「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受け

ヨハネの黙示録を味わう

ることが定まっている」とあります。私たち人間にとって、これ以上、確かなことはありません。人はみな例外なく百パーセント死にます。それと同時に、百パーセント確かなことは、「審判」を受けるということです。

●ここで重要なことは、ここでの審判は「救われているか、救われていないか」の審判ではありません。救いは人が死んだその時に決定されています。ですから、ここでの審判は人が生前行った行いを通して、さばきの程度を決定するためのさばきなのです。

③審判の基準

●その審判についてヨハネが見たことを私たちも見たいと思います。12 節から 15 節までどのような基準によってさばきがなされるのでしょうか。

- | |
|--|
| <p>12 また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところから従って、自分の行いに応じてさばかれた。</p> <p>13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行いに応じてさばかれた。</p> <p>14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。</p> <p>15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。</p> |
|--|

●白い御座の前には幾つかの書物が開かれており、死者たちは一人一人その書物に記されているところから従って裁かれます。いのちの書に登録されていない者はみな火の池に投げ込まれます。いのちの書に記されている者はフリーパスでこの審判を免れます。御座の前に立つ者たちは、死とハデスから出されて来た者、海から出されてきた者です。彼らはそれぞれの行いに従い、書物に記された基準によって裁かれました。死者の牢獄となっていた「死とハデス(救われていなかった者の魂が死んだ後に行く所)」も火の池の中に投げ込まれました。そしていのちの書に記されていない者も火の池に投げ込まれました。この火の池に入ることを、聖書は「第二の死」と説明していますが、人間の最後の敵である「死」はここにおいて完全になくなるのです。

④キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで

●使徒パウロは、だれにも見ることのできない「第三の天」にまで引き上げられた人です。その「第三の天」のことを「パラダイス」とも言います(Ⅱコリント 12:1~4 参照)。そのパウロが、最後の審判の後に起こることを以下のように語っています。

【新改訳改訂第3版】Ⅰコリント 15章 24~26節

- | |
|---|
| <p>24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。</p> <p>25 キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。</p> <p>26 最後の敵である死も滅ぼされます。</p> |
|---|

●これまで学んできた「千年王国」の祝福は旧約の預言成就の頂点でしたが、それも神のご計画の中では、最終的なご計画に至る一つのプロセスにすぎません。新しいエルサレム(イエルーシャライム)こそ、最終的なゴール地点です。